

協同組合の役割考える

神戸で
シンポ

日常的なつながり提言

阪神大震災 20年

阪神大震災(199

5年)でも被災者支援

にあたった、協同組合

のこれからのあり方について話し合うシンポ

について話し合うシンポ

について話し合うシンポ

について話し合うシンポ

について話し合うシンポ

について話し合うシンポ

について話し合うシンポ

について話し合うシンポ

について話し合うシンポ

について話し合うシンポ

について話し合うシンポ

「プこうべ」の生みの親でもある「賀川豊彦」の業績を紹介する賀川記念館などが共催。冒頭で阪神、東日本大震災の犠牲者らに黙とうをささげた後、神戸商科大名誉教授で「神戸復興塾」塾長の小森星児氏が基調講演した。

小森氏は「震災時に人々の『絆』は被災者を救うことにつながったが、あくまで一時的なものにすぎない」と分析。「『支援する者』

と『支援される者』に色分けしても、一時的には効果を上げても長続きはしない。普段から支え合えるような、新しい形の『協同』のあり方を考える必要がある」と提言した。

その後のパネルディスカッションで、コープこうべ元理事の柳瀬啓子氏が、震災直後に組合員の安否確認がスムーズに進んだ事例を紹介し「組合の日常的な活動で、組合員同士

がつながっているからできたことだ」と指摘。近畿労働金庫地域共生推進部長の浦田和久氏は「これからは協同組

合が連携し、地域を良くしていくことが、組合員の幸せにもつながるのでは」と訴えた。

【石川貴教】



これからの協同組合のあり方について話し合うパネリストら—神戸市中央区の賀川記念館で